

1月

【収藏品紹介】
中島信義著『草木実験 盆栽仕立秘法』
(東京博文館、明治35年)

中島信義著『草木実験 盆栽仕立秘法』は、国風盆栽展の生みの親で、雑誌『盆栽』主幹の小林憲雄が若き日に愛読するなど、明治・大正の盆栽文化を考へる上で重要な書籍です。今回は本書の内容とその特徴について紹介していきます。

最初に本書の刊行の目的を確認したいと思います。冒頭に位置する「序」では、まず「陶磁」の盆(鉢)の中で小さな樹木を培養し、「天眞の風趣」を小さな瞳の中で楽しませるものを「是れ盆栽術の妙技ならずや」と述べ、これまで「邦人」は



中島信義著『草木実験 盆栽仕立秘法』
(東京博文館、明治35年)

「貧富」に関わらず「愛玩」してきたと述べています。いまや万事繁忙の時、しかし「天眞の幽趣」を味わい、精神を養う策がない中で、「盆栽術」こそが「優に人生必備の楽事」ではないか、と述べています。

この「序」は二百文字程度の非常に短い文章ですが、この当時の盆栽文化を知る上で興味深い点がいくつか指摘できます。

第一に、本書刊行の明治35年の時点で、現在にも通じる「盆栽とは何か」「盆栽の本質が十分に理解されていること」です。盆栽の歴史でいえば、明治時代は「鉢植え」から「盆栽」へと呼称の変化が指摘されていますが、その中で盆栽観がいつ、どのように形成されたのか、この一連の過程を探る上で、本書の記述は大変参考になると思います。第二に、繁忙を極める社会にあつて、盆栽は精神を養うための「楽事」であるとし、このことが本書執筆の背景となっていることです。注目したいのは、この「序」はおろか本

文においても「美術」や「芸術」の言葉が見当たらないことです。このこともまた明治35年時点での盆栽観を示していると言えるでしょう。

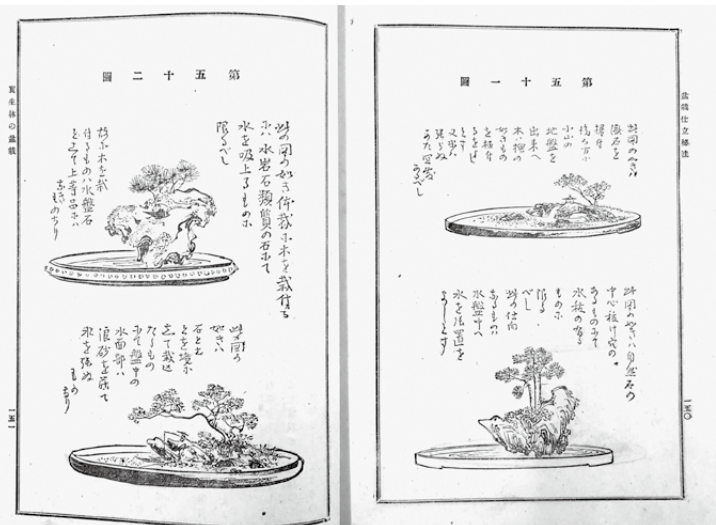
続いて本文の構成・内容ですが、全部で23の章に分かれており、盆栽の仕立て技術や肥料・用土、盆栽道具、温室、盆栽棚の設置法や病害虫対策など、その大部分は実践的な技術に関する解説となっています。この解説部分では、随所に参考図(全部で55図)が掲載されており、その図版の豊富さが、当時すでに豊かな盆栽文化が存在していたことを示しています。

一方で、書き出しの1〜3章に「盆栽の楽」「盆栽並に鉢植物年度における流行り棄り」「盆栽と植木資格と優の劣」と盆栽の目的、歴史などが配置されている点は注目されます。特に「盆栽の楽」では「盆栽とは何ぞや」と植木とは何ぞや」との問いかけから始まり、盆栽と「植木」の定義が「一個の浅き小陶器に植込みて老木樹園の趣味を含めるもの之を盆栽といひ深く鉢内に植込みたるものを植木といふに外ならず」と説明されています。ここから本書では「植木」が鉢植えと同義で使用されてい

草木実験 盆栽仕立秘法 目次

- 一 盆栽の楽
- 二 盆栽並に鉢植物年度における流行り棄り
- 三 盆栽と植木資格と優の劣
- 四 若の性質を區別し及び盆中へ根を縛させる法
- 五 丹精と植年
- 六 肥料として探擇すべき用土の事
- 七 肥料の心得

『草木実験 盆栽仕立秘法』目次



「十九 実生林の盆栽」の章では、「石付き盆栽」について図解されている

ることが分かりますが、盆栽と鉢植えとの区別を明確化し、それを巻頭で説明している点に、従来の盆栽関連書籍には見られない、構成上の新しさが指摘できます。

管見の限り、本書以前の盆栽書籍において、実践的な技術解説に先んじて盆栽の概念に触れている書籍は本書と同じく明治35年刊行の『小物盆栽実験集』(著者・春基園主人)だけです。とりわけ「盆栽並に鉢植物年度における流行り棄り」では、江戸時代の天保期から明治の現在に至るまでの「盆栽並に鉢植物」の歴史が紹介されており、これもまた本書以前には類例を見ないものです。盆栽の定義や意義、歴史を押さえた上で、実践的な技術を解説する本書の構成は、盆栽を社会的文化的な観点から捉えようとする点で、それ以前からの質的な変化が指摘できます。なお、本書が刊行された明治35年は、5月に「聚楽会」(翌年に『盆栽瓶花聚楽会図録』を刊行)が結成されており、前述の『小物盆栽実験集』の刊行も鑑みれば、この年に明治時代の盆栽のひとつの画期を見ることのできるかも知れません。

天保期以降の盆栽・「鉢植物」の「流行」が具体的に記されており、同時代を生きた人物(著者・中島)が書き残した盆栽流行史として貴重な内容です。

ここでは、天保から明治までを比較してもそこまで大きな違いはないが、しかし「植込の体、植鉢の形ちなど」は流行り廃りが甚だしいとして、時代順に流行が記されています。例えば、天保から嘉永頃までの流行として、「鉢は圓(まる)形にて深し繰り形足付、木は松なれば銀生の五葉にて強て枝をためざるもの」と、流行していた鉢の形状およびそこに植えられていた樹種の特徴などが記されています。また、この時期には丸形の深い「繰り形足付」の染め付け鉢に植えられた梅も流行していたようですが、この頃はまた梅の「古木」が好まれます、安政頃から流行しはじめたことなど、その内容は実に細かく興味深いものです。

明治初年の「文人松」やヒバの流行などは他の文献からも確認できることから、その記述内容の信憑性はかなり高いと思われる。江戸後期から明治期の盆栽史を研究する上で本書は必読の資料と言えるでしょう。